

「入学・新生活応援給付金」聴き取り 報告書

「入学・新生活応援給付金」とは・・・

入学・新生活を迎える生活保護世帯や住民税非課税世帯、児童養護施設や里親など社会的養護のもとで生活している子どもへ届ける3万円～5万円の返済不要・成績不問の給付金。みんなのことを想っている人が『ここにいるよ。』というメッセージとともに給付金を届けることが目的である。2015年度は2400人以上の人から温かいご寄付と想いをお預かりし、198人の子どもへ合計779万円をお届けさせていただいた。

「入学新生活応援給付金」聴き取りについて

あすのぼでは、2015年度に入学・新生活応援給付金をお届けさせていただいた198人（子ども本人と保護者・施設長など）を対象に「入学・新生活応援給付金」アンケートを2016年秋に実施した。アンケートでは134人（回収率67.7%）から回答を得られ、給付金の感想や子どもの貧困対策に関する貴重な意見をお寄せいただいた。

聴き取りは給付金の感想や生活状況などについて回答者のうち子ども12人と保護者・施設長など13人から直接お会いして聴き取りを行ったものである。今後の給付金事業や本格的な実態調査、政策提言の検討につなげることでさらなる子どもの貧困対策推進に寄与することが目的で、聴き取りは2016年11月から2017年3月にかけて実施した。

【聴き取りの概要】

聴き取りは自宅・施設または自宅近くの喫茶店などで1時間から2時間程度行い、聴き取り実施日、都道府県、区分、担当者、人数内訳は以下の通り。

実施日	地方	協力者	区分（年齢）	担当者
2016年11月13日	東海・北陸	・Aさん ・施設職員	・社会的養護 ・高校卒業等（18）	柳瀬、 吉田（学生）
2016年11月17日	関東	・Bさん ・Bさん母	・住民税非課税 ・中学校卒業（15）	久富
2016年11月19日	北海道・東北	・Cさん ・Cさん母	・住民税非課税 ・中学校卒業（15）	村尾、 梁瀬（学生）
2016年11月20日	九州・沖縄	・Dさん ・Dさん母	・住民税非課税 ・中学校入学（12）	小河、 迎（学生）

2017年1月20日	九州・沖縄	・Eさん ・Eさん母 ・施設長	・住民税非課税 ・小学校入学(6)	村尾、 秋吉(アドバイザー)
2017年1月22日	九州・沖縄	・Fさん	・生活保護 ・高校卒業等(18)	村尾
2017年1月22日	九州・沖縄	・Gさん ・Hさん ・Gさん、Hさん母	・住民税非課税 ・中学校卒業(15)	村尾
2017年2月14日	関西	・Iさん ・Iさん母 ・Iさん父	・生活保護 ・高校等卒業(18)	村井、 村尾
2017年3月12日	関東	・Jさん ・Jさん養育者	・社会的養護 ・中学校入学(12)	久富
2017年3月18日	東海・北陸	・Kさん ・Kさん母	・生活保護 ・中学校卒業(15)	柳瀬
2017年3月20日	東海・北陸	・Lさん ・Lさん母	・生活保護 ・中学校卒業(15)	柳瀬
2017年3月21日	東海・北陸	・Mさん父	・住民税非課税 ・中学校卒業(15)	柳瀬

<子ども人数 内訳>

区分	小学校 入学(6)	中学校 入学(12)	中学校 卒業(15)	高校 卒業等(18)	合計
生活保護			2	2	4
住民税非課税	1	1	4		6
社会的養護		1		1	2
合計	1	2	6	3	12

<保護者・施設長など人数 内訳>

区分	小学校 入学(6)	中学校 入学(12)	中学校 卒業(15)	高校 卒業等(18)	合計
生活保護			2	2	4
住民税非課税	1	1	4		6
社会的養護	1	1		1	3
合計	2	2	6	3	13

【Aさんと施設職員への聴き取り】

＜今回の給付金の感想＞

昨年（2015年）就職が決まり、児童養護施設を出てアパート暮らしをしなければならなかった。引っ越し費用（家賃・保証金・電化製品・ベッドや家具）を考え、アルバイトをしていた。しかし、高校3年生の時に問題が起こり、計画していた新生活の資金が不足していたので、大変助かった。

給付金については、施設長が新聞を見て募集されていることを知った。就職して施設を出る人への給付金制度はあまりないので魅力に感じた。

＜生活状況について＞

現在、運送会社に勤務している。日曜日は休みだが、朝5時出勤の時もあり、勤務時間は不規則。就職したばかりなので、夏のボーナスは雀の涙。まだ大型免許がないため、大型トラックの運転はできない。トラックの助手席に乗り、荷物の積み下ろし。倉庫内ではフォークリフトを使って、コンテナから荷物を降ろし、区分けして各所に再度運ぶ。配達物品を痛めた時は、自分で買い取らないといけない。大型免許取得後は、今の会社を辞めて別の会社に就職したいと思っている。

食事は一日三食摂らず「お腹が空いたら食べる。空かなかったら食べない」を徹底している。夏場は特に喉が渇くので、飲み物を優先した。一人暮らしを始めてから、担当だった施設職員がAさんにラーメンをごちそうした。その後、施設職員は、今のAさんにはラーメン屋の「一杯のラーメン」より、カップ麺数個の方が良かったのではと考えた。Aさんは、児童養護施設退所後も定期的に施設を訪問している。

両親と絶縁の状態、Aさんは3歳から高校卒業まで施設で生活してきた。中学校、高校は野球部で、ピッチャーを務めたが「ガラスのハート」で緊張しやすく、試合では良い結果を出すことができなかった。今は、日曜日に早起きして町の社会人野球に入り、野球を続けている。将来は、お金を貯めて中学校から付き合い合っている彼女と結婚を考えている。

今まで施設に居て生活することは守られていたので、知らないこと、わからないことが多い。初めてアパートでの一人暮らし。電気料金の検針表が郵便ポストに入っていた。その内容とその用紙を見て、使用料はどうしたらよいのかわからなかった。わからないことは、施設職員に聞くことや相談ができるし、施設にも行けるので助かる。

【BさんとBさんのお母さんへの聴き取り】

＜今回の給付金の感想＞

お金以外の面も意義があったと感じている。給付金がきっかけであすのばの行事に参加するようになり、行事から帰ってきた時に「疲れた～」と行って帰ってくるが、「どうだった？」と聞くと、Bさんはあった出来事を次から次と話してくれる。全国に友だちもでき、その子に会いたいから夏の合宿にも参加した。

給付金は、他の手続きのために役所の支援窓口に行った時に、たまたま担当の人に教えてもらった。担当の人は新聞の小さな記事を見て、それを見せてくれた。世代の近い学生たちが主体となって活動していることで団体への安心感を持てた。タイミング良く知れたから良かったけど、もう少し早く知れても良かったかも。役所などの窓口チラシが置いてあれば、目に止まって役所の人にも聞くことができる。

制服代だけでも5万円以上する。給付金4万円だけでは足りないが、母子家庭向けの奨学金も15万円くらいあり、新生活のために必要だった費用20万円のうちの足りない分を、あすのばの給付金で賄うことができた。

＜生活状況について＞

Bさんは商業高校に進学。同じ中学の子はほとんどいない。小学生の時から続けているバドミントン部に入部。大会で優勝もしている。通学は、片道1時間ほどかかり、朝は5時に起き、お弁当を作って、6時半前には家を出る。自転車で20分～40分かけて駅まで向かっている。帰りは、部活が19時くらいに終わり、一時間に一本くらいしか電車がないので、一本電車を逃すと20時ころになり、帰るのが21時すぎと遅くなる。夜はご飯を食べて直ぐ眠くなるので、なかなか勉強の時間がとれない。勉強は大変だけど、学校は楽しい。

お母さんは食堂の調理員として働いている。なんでも一人でやれるようになってもらいたいというお母さんの願いで、高校のお弁当もBさんが自分でつくっている。初めて行ったあすのばの行事も、一人で挑戦して経験させたいという気持ちで東京まで送り出した。電車の乗り方など、知ってもらいたかった。

高校入学後、お母さんが10日間ほど入院した。その間Bさんは一人で家にいて生活しなければいけなくなったので、心配だし大変だった。バドミントンを小学校から一緒にやっている仲の良い友だちの家が近くにいるから頼れる。

新たな環境に身を置くことが好きで、新しい人と繋がりがたくて、中学校も学区の違う学校へ進学し、つらいこともあったが一からの人間関係づくりに挑戦した。高校も、同じ中学校の生徒が少ししか進学しない高校へ行くことを決めた。

【CさんとCさんのお母さんへの聴き取り】

<今回の給付金の感想>

給付金は高校の部活動で使うユニフォーム購入に全額使わせていただいた。入学に関してはある程度準備をしていたが、部活動で揃えるものにお金がかかり、大変助かった。Cさんは部活動が楽しくて学校生活が充実している。

Cさんはあすのばの行事にも参加し、友だちとの再会や出会った仲間と連絡を取り合っていて楽しいし、「お金」以外の面でも給付金から得たものは大きい。

中学3年生の時に学校でプリントを配られてつながった学習支援団体でお世話になり、その団体から色んな情報をいただいた。2人（CさんとCさんのお姉さん）とも高校・大学に入学だったので、応援してもらえるところを探していた。給付金のしおりにキャンプの情報も入っていて、同じような境遇の子どもと話ができるし、キャンプもどうかと話し、応募につながった。すでにつながっている学習支援団体からの紹介だったので信頼性もあった。

<生活状況について>

Cさんは公立高校を目指していたが、結果的に私立へ通うことになり、入学時のお金以外にも施設維持費や運営費を毎月支払わなければいけず、生活上厳しいと感じている。高校に入学した後で地元の企業が行う給付型奨学金（月1万円）と半額給付型奨学金（月3万円）で毎月の教育費用を賄うことになった。

ずっと高校に入ったらやりたかった部活動はユニフォームだけではなく、大会などで遠征が多くある。先日も遠征があったが、お母さんは「それは申し訳ない、ごめんなさいと、この子だけ行かなかった」と話す。他の遠征も最初は無理かなと思っていたが、先生からお願いされて何とか遠征費を捻出した。続けていくためにもお金がかかる。報道で高校生に批判があり、冷たい言葉を聞くと、お金がないなら部活を辞めろと言われていたように感じた。

お母さんは求職中で仕事がない状態。児童扶養手当（子ども2人は18歳になったので1人分）と養育費と貯金を切り崩して生活をしている。仕事も年齢的なことや結婚していた期間は専業主婦だったこともありパートの仕事で安定することは難しく、厳しい生活が続いている。

生活については節約しながら何とかやっつけていこうと思っているが、大きな病気になった時のことが心配。保険に入るのにもお金がかかり、月々に払う何千円かも厳しい状態。子どもの大学進学費用だけは子どもが小さい時から貯金をしてきた。その面では何とかかなるかなと思っていたが、いざCさんのお姉さんが大学に進学して学費だけではなく他にもお金が色々とかかり、その負担が想像以上に重くのしかかってきた。

【DさんとDさんのお母さんへの聴き取り】

<今回の給付金の感想>

返さなくてもいい給付金はとてもありがたかった。役所で4万円弱の無利子貸与の一時金の手続きに、子ども本人の同意書や保証人など手続きも多くうんざりした。必要最低限の手続きで送金してくれることはとてもありがたかった。他の制度だと職場に毎月の給料などについてもわざわざ特別な様式で書いてもらわないといけないようなものがあるが、職場にいろいろな事情を話すこともしなくてはならないし、負担が大きい。

給付金はネットで給付金を調べていて見つけた。ちょうど募集期間だったので、申請書をダウンロードして申し込んだ。母子家庭がつかえる制度は、役所から積極的に教えてくれることはないので、必死に探しているが、行政の制度ももっと利用できる情報を積極的に教えてほしい。

給付金の支給時期も3月だったので助かった。他の場合、入学後というケースが多い。給付金もうれしかったが、キャンプに参加できたことがさらにうれしかった。東京とかいろいろなところに友だちもできたのでとても良かった。

Dさんは、スポーツの強化選手として活動したかったことや英語教育が充実していることもあって、私立中学に入学したため、就学援助を受けられないなど、ほとんどの制度が利用できなかったのもとても助かった。

<生活状況について>

進学した私立中学校がとてもひどい学校だった。スポーツの練習は深夜になることもあり、携帯電話を持参したかったが別の生徒は許されてもうちの息子には許されなかった。運動会の日程が変更されてもその連絡もない。担任に何を相談しても「無理」だったり、返事がなかった。

あまりにもひどかったので、11月に地元公立中学校に転校した。地元公立中学校は、教頭先生も担任の先生もとても対応がよく、息子の受け入れもとてもスムーズにしてくれた。保護者への連絡もしっかりしていて、最初から地元公立中学校に行かせておけば良かったと思っているが、早く転校できて、とりあえず良かった。就学援助も受けられるし、給食もあるし、本当に良いことばかり。

お母さんは、仕事がいくつも変わったが、今は思うように仕事ができている。シフトなども柔軟に対応してくれるのでほっとしている。市営住宅に住んでいて、母子世帯の住宅費減免制度も今は受けているが、知らない時は受けていなかった。同じような立場でも知らない人も多いのではないかな。

【EさんとEさんのお母さん、施設長への聴き取り】

<今回の給付金の感想>

就学援助は7月にならないと受け取れず、一番お金のかかる入学前・入学直後に現金としていただけたことがありがたかった。給付金は筆箱や文房具、上履きなど学用品と衣服の購入に使わせていただいた。ランドセルは母子生活支援施設からいただいた。お姉さん（小学6年生）がいて、大体はお下がりで済ませているが、小学校に入学する新生活で新しい服を買ってあげられたのも良かった。

給付金は以前に暮らしていた母子生活支援施設から案内をいただき、直ぐに応募させていただいた。施設長は、ひとり親支援の研修会時に給付金の資料が配布され、募集のアナウンスもあった。

用途が限られていない点も良かった。母子寡婦連合会や母子生活支援施設からランドセルなど現物支給の支援はいくらかあるので、用途が限定されていた場合は応募しなかった可能性もあった。

<生活状況について>

昨年度末で会社の業績悪化を理由に勤めていた仕事を会社都合で辞めることになった。Eさんのお姉さんの体調が優れず長期入院をすることになるなど、生活が落ち着かず昨年いっぱいまでは失業保険で何とかつないだ。失業保険が出ているうちに母子寡婦連合会が実施する資格が取れる講習を受け、今月から登録制の仕事を始めた。姉も12月で退院して再び学校へ通い始めるが、また体調を壊しがちになっている。本当は週5日フルタイムで働きたいが、心配でなかなかそうもできない。

Eさんは健康で、元気に過ごしている。「でも、学校に行きたくないけどね～」とEさんは明るく話す。まだお母さんに甘えたい歳で、いつも家でお姉さんも一緒にお母さんにくっついている。お母さんも「子どもと一緒にいられる時間を大切にしたい」と話す。4月から母子生活支援施設に入所している世帯限定だった学童保育が退所した子どもも受け入れてもらえるようになり、Eさんは施設内にある学童保育に放課後通っている。

仕事は登録制で月収5万円～6万円。今年の秋には賃貸の契約更新があり、更新を断られてしまわないか不安。住宅関係の貸付制度も考えたが、自分が何かあって倒れてしまったりした時のことを考えると貸付は手が出せない。公営住宅も応募したが、8番目で8世帯転出がないと入れない状態。4月・8月・12月に支給される児童扶養手当（1回約16万円）と10月・2月・6月に支給される児童手当（1回8万円）が命綱。養育費はない。今は子どもが幼いが、18歳になって手当が打ち切られた後の生活が今から不安。

【Fさんへの聴き取り】

<今回の給付金の感想>

奨学金は学費などを支払う期日のあとにもらえる。その前にお金が必要だと思っていたので、あすのばの給付金で授業に間に合うように教科書や電子辞書を買うことができた。自分の周りにはお金がなくて困っている人がいなくて「自分だけが…」と思っていたので、みんなのことを想ってくれている人がいると知れて嬉しかった。お母さんも「あって良かった」と話していた。

給付金は役所のケースワーカーが定期的に来ていて、その時に教えてもらった。「給付金」ということが一番の魅力だった。もらえるんだったらもらっておかないとという気持ちが強かったし、それだけ困っていた。貸付だったら応募していなかったと思う。また、申請書は書きやすかったと思う。

<生活状況について>

あすのばの給付金があって入学に必要なものも買えて、行事にも参加できて居場所を見つけられて良かった。大学はクラスがある訳でもなくダンスのサークルにも参加できてなくて嫌だったけど、今はあすのばで知り合ったみんなも頑張っているから自分も頑張ろうと思える。

教員免許をとるために大学2年になるとまたお金がかかる。バイトもしているが、もっと稼げるバイトじゃないとやっていけない。進学を志した最初のきっかけは先輩が大学に行っている話をされていて、それを聞いていた周りの人が『ちゃんと大学に行っているんだ』となって、自分も行きたいなと思った。

母はくも膜下出血で手術をして現在も療養中で病院に通うなど働けない。お母さんには色んな不安や大変さがあったと思う。高校1年生の時から大学には行きたいなと思っていた。お母さんとは「お金が必要だね」とずっと話をしていたが、生活保護を受けているのでお金を貯めることができなかった。なんとかなると思っていたが、高校3年生くらいで「やばい」と思った。

お母さんも子どもの頃にお金がなくて大学に行けなかった。お母さんはおばあちゃんに預けられて育ち、お母さんが進学するために貯めていたお金も盗まれたりして大変だった。同じ想いをさせたくないから「お金はどうかする」と言って、借りられるところから何とかお金を借りて進学できた。

Fさんは小さい時からお金に困っていることは分かっている、色々がまんし続け、今も友だちに遊びに行こうと言われてもしょっちゅう断っている。お母さんのも含めてあまり服も買わないけど、買い物に出かけると優先して買ってくれて、お母さんの服があまりない。子どもだけでなく、お母さんが集まれる場所や機会もあれば良いと思う。

【Gさん、Hさん、Gさん・Hさんのお母さんへの聴き取り】

<今回の給付金の感想>

給付金は、制服の購入で助けられた。中学校入学の時は入学前からママ友の先輩に「サイズとかどんなものでも良いから」と話し、もらうことができたが、高校では進む学校が別々なので、お下がりをもたらうことが難しかった。そこで、制服のオーダーまでに給付金を受け取ることができ、サイズが合った新調の制服を購入できて本当に嬉しかったし、助かった。

中学校3年の時に役所の学習支援を活用し、それがきっかけとなって役所の人が給付金のことを教えてくれた。用途が限定されておらず自由に使う良いお金だったことが魅力だった。日々の暮らしの最低限は何とかできるけど、入学や何かあったなどまとまったお金が必要な時が本当に困るから、そのような時に一時金としてもらえるのも魅力だった。

<生活状況について>

4人兄妹で、三つ子3人とも同じ高校に合格できて、毎日同じ高校に通っている。部活動はGさんとHさん2人がスポーツをやっていて、もう一人はダンスをやっている。GさんとHさんはケガがきっかけで部活動を辞めた。行きたい大学に進学をするための勉強や、今はアルバイトもして少しずつお金を貯めようと思っている。もう一人は海外での仕事に興味を持って将来留学もしたいと考えている。まだ長男がこれからどうなるか分からないが、お母さんも仕事を変えてフルタイムの仕事に就くことができた。

ママ友の先輩が困った時にいろいろと教えてくれたりしていた。三つ子なので3人ともスポーツやダンスがやりたいと言うと3人分の用具を揃えないといけないこともあった。

子ども3人が小学校にあがる前に離婚して実家に戻り、近所の同世代で友だちになった人が同じ母子家庭で、その人経由で母子会にもつながった。最初は入学関係でお世話になり、行事にはなかなか参加できなかったが、中学校入学の時もお世話になって今もつながっている。子どももボランティアで関わっている。離婚後落ち着いたら実家から出るつもりだったが、長男のこともあり今も実家で祖母と一緒に暮らしている。

長男は高校に入ったあとで引きこもりになり3年くらい大変な生活が続いた。長男に付き添いきりで、なかなか下の子ども3人を看ることができなかった。祖母と一緒にいてくれたので何とかあった。仕事もしたかったが長男に付き添わなければいけなくてできなかった。

【Iさん、Iさんのお母さん、Iさんのお父さんへの聴き取り】

<今回の給付金の感想>

Iさんは専門学校に進学し、検定料や実習にかかる費用など入学してから判明したお金があり、給付金は検定料などに使った。支払いの直前になって伝えられることが多く、あすのばの給付金制度があって本当に良かった。今年も妹が高校に入学するため、給付金に応募させていただいている。

生活保護を受けており、給付金はIさんが専門学校に進学する時に担当のケースワーカーから教えてもらった。給付金のことを教えてもらったタイミングが締め切り間際だったので、急いで応募をした。

<生活状況について>

専門学校によっては授業料を安く抑えて月々の検定料などは別途で、というシステムがある。入学時は費用が抑えられると思ったが、入学してから少なくとも10万円くらいは検定料や実習などでお金がかかった。電車の運賃が高く定期代も高くて、通学にもお金がかかる。現在Iさんは実習に行っていて来年度は就職活動がある。専門学校では2年生になっても検定など月々お金がかかる。

父親が病気で倒れてしまってから生活保護を受けている。現在は、父親も働き母親もスーパーでパートの仕事をしているが、なかなか余裕ができない。

一つの部屋にIさん・お母さん・お父さん・勉強しているIさんの妹の全員がいた。聴き取りの間もずっと妹が勉強机に向かって勉強していた。



～聴き取りの様子～

【Jさん、Jさんの養育者への聴き取り】

＜今回の給付金の感想＞

Jさんはファミリーホームで暮らしているが、自治体からの委託費だけでは、必要な費用の4分の1から3分の1くらいしか賄うことができない。あすのばのような団体や給付金制度があることで、ファミリーホームを応援してもらえているということがわかり心強かった。

給付金は新聞をみて知った。Jさん自身もこういう団体があるということを知らなかったが、今回の給付金を機に、色んな支援団体などがあることを知った。Jさんの養育者たちはもちろんいつも自分を応援してくれているけど、それだけじゃなく、他の人たちも自分を応援してくれていると思うとうれしかった。

＜生活状況について＞

Jさんは、部活は文化部に入っており、週3日は塾に通っている。週1日くらいの頻度で学習支援にも通っている。「中学校は楽しい。小学校から持ち上がりで入学する子がほとんどなので、男女問わず仲が良い。特に男の子は子どもっぽく、虫のおもちゃを使って驚かせてきたりするので、そういうところはちょっと困っている。昔、実父にも虫の形のチョコレートを差し出され驚いたことがあり、男の子はいくつになっても同じなのかなと思う。高校はまだ何も決めていないけど、制服のかわいいところや、男女共学に行きたいと思う。」とJさんは話す。

Jさんの養育者も子どもたちには勉強をがんばってほしいと思っている。大変な境遇だからこそ、これから独り立ちしていくためには、勉強ができる子になることが大切だと考えている。勉強ができれば、やりたい事の選択肢の幅も広がる。

ファミリーホームは、児童養護施設と違って自治体からの委託費なども十分ではない。入学においてもすべてを賄うことが難しい。ファミリーホームは、あくまで里親の延長であり、ある程度の費用は、養育者の家庭からの持ち出しが必要となる。そのため、児童養護施設とは違うということを考慮のうえ、ファミリーホームも支援を受けられるような、きめ細やかな選考基準や応募条件の給付金や支援制度が広がってほしい。

また、ファミリーホームの子どもの場合、特別な事情がなければ家庭教師の費用を出してもらえない。そのため、派遣型（家庭教師型）の学習支援制度などがあればいいとも思っている。

【Kさん、Kさんのお母さんへの聴き取り】

<今回の給付金の感想>

Kさんのお姉さんが専門学校へ進学するため、引っ越しなどでお金がかかるので、Kさんは高校に進学するために制服なども人からもらい準備していた。しかし、Kさんが高校に入学する時に制服が一新され、準備していたものが台無しに。お金ができず悩んでいた。どうしたら良いかと頭を抱えていた時にたまたまお母さんが新聞を見て給付金を知った。

お金が必要で、眠れない日が続いていた。必要最低限でいいと言ってくれるKさんに、それさえも難しいと言えず、本当に感謝している。返還の必要がない給付金は魅力的だった。

<生活状況について>

Kさんは、高校に入ってから大学進学を目指して勉強に励んでいる。塾にも行きたいが、お金がない。学校の授業が終わって、図書館で自学自習して家に戻り、毎日深夜まで机に向かい勉強している。

お母さんは10年前まで3つの仕事を掛け持ちして仕事をしていた。その結果、身体を壊して働けなくなった。役所で相談したら、まずは子どもを「児童養護施設に入れろ」と言われた。子どもたちと一緒に生活するために、生活保護を受けるまでは無理を重ねた。救急車で運ばれたこともある。近くの病院では治療できず、別の病院に運ばれた。お母さんは心臓が悪いため、現在も仕事につくことができない。

薄暗い平屋住宅は、築50年くらいの公営住宅である。大きな薄型テレビが部屋には少し不釣り合いだったが、「これももらい物です」と飾らずにお母さんは話をしてくださった。食べるものが何もなかった時、近所の人がクーラーボックスいっぱい食料品を詰め込んで持ってきてくれたこともあった。

お母さんは、元気な時は町内会で役職も務めた。その時に地域の子どもの名前はすべて覚え、わが子と同じように意識して「〇〇ちゃん」と呼んだ。

Kさんの学校の事務員とも仲良くなり、家の事情もすべて話をしている。お金がない時は「半月待つて」と連絡して、待ってもらっている。人間関係でなんとか生きている。

田舎では、三世代が一緒に生活しているから何とか豊かさが保っていられるだけで、これが崩壊すると、一気に苦しい地域となる可能性が高い。他の地域はその状況が進んでいるだけで、どこで止めるかが今後の問題。歯止めを掛けていくにはどうしたら良いのか。

【Lさん、Lさんのお母さんへの聴き取り】

<今回の給付金の感想>

Lさんが高校進学する時に申し込みを行った。Lさんの他に姉さんが3人いる。一人は、専門学校に通いながら美容師を目指している。一人は、保育士を目指し、奨学金とアルバイトで短大生。もう一人は、商業高校に通う高校生だった。

お姉さんの進学にあたり、少しお金を借りていた。2015年から生活保護を受けていたので、とにかく、Lさんの進学にお金が必要だった。制服（ブレザー、夏用と冬用ズボン、長袖と半袖ワイシャツ、ネクタイ）と体操服（冬用・夏用）、体育館履きなどの購入に10万円かかった。その時、あすのばの給付金は大変助かった。

給付金は、たまたま去年から取り始めた新聞に給付金募集の記事が載っていて、それを見て応募した。お姉さんは貸与の奨学金を月額3万円受けている。返還しないといけないお金は大変なので、給付は魅力的だった。

<生活状況について>

Lさんは朝から昼までの定時制高校に通っている。13時には自宅に戻り、昼食を食べる。週2～3日は夕方からアルバイトをしていて、月1～3万円を稼いでいる。アルバイト収入の半分は専門学校に進学するために貯金し、半分は友達と遊ぶお金に使っている。

入学早々、半強制的に部活動に入部したが辞めた。顧問の先生が「練習に出なくても試合に出てくれば良い」と言っていたが、試合に出たら練習にも出るとメールや電話がしつこいくらいにきた。アルバイトができなくなるので部活動は辞めた。

お母さんは、離婚後4人の子どもと生活するために仕事を探した。しかし、10社も就職試験を受けたがすべてダメで、2015年から生活保護を受けるようになった。

自転車壊れた時、生活保護の担当者に相談したが、結果は「生活保護費の中で積み立てて購入して」だった。結論が出るまでに時間がかかり、積み立てるでは、相談した意味がない。お金が出せないならば、中古自転車などリサイクル商品の情報を出してほしいと思った。

地域で子ども食堂が開設されたことは知っているが、その場所へ行くのに交通の便が悪い。もっと工夫をしてくれれば、支援を必要としている人たちに届くのではないかと思っている。

【Mさんのお父さんへの聴き取り】

<今回の給付金の感想>

Mさんは、生まれつき目が不自由で何とか見える程度だった。給付金の申込時に左目より見えていた右目の異常を訴え、病院で網膜剥離と診断された。東京の先生を紹介され受診。給付金は経済的にも精神的にもホトホト困り果てていた時だったので、希望を持つことができた。

Mさんのお父さんが新聞の普段なら見逃してしまうような小さい記事に目が止まり、吸い込まれるように、その記事を読み、光を見いだしたような気持ちで応募した。精神的にまいっていた時だったので、経済的にもありがたかったが、困っている人を応援してくれる人の存在がいることが魅力だった。

<生活状況について>

仕事は契約を打ち切られ、新聞配達で細々と生計を何とか維持してきたが、その新聞配達もダメになった。田舎では仕事がない。Mさんの治療や手術のため何度も東京へ連れて行くため、交通費の負担が半端ではない。

Mさんの兄弟は、今年度に大学受験だったが塾に通わせるお金がなかった。大学の合格発表が控え、合格すると直ぐ大学の寮の申請をしないといけない。手続きが遅れると寮に入れず、民間のアパートでは敷金や電化製品購入などの費用を捻出することができない。貸与型の奨学金は借りさせたくない。親として子どもに借金を背負わせたくない。

お父さんは、大学卒業後、金融機関に就職した。転勤族で単身赴任、土日もないような仕事のため、お母さん一人で子どもを育てていた。会社には、障害のあったMさんの出生直後から、自宅から通える配属を希望し続けたものの

「家庭より仕事が優先」という対応をされ続け、自宅から一番遠い転勤命令が発令された。その辞令に対して「大切な家族を守りたい」と辞令を拒否して退職。その後は代理店契約を結び、個人事業主として仕事をしてきた。収入は激減し、突然、理不尽なやり方で契約を解除された。その後、定職に就けず、蓄えも尽き、新聞配達とわずかな単発の仕事、公的な手当で生計を立てていた。

3人の子どもたちの教育費が重くのしかかる中、子どもたちのためのお金だけは何とか頑張って払っていた。しかし、Mさんの入院を機に新聞配達の会社から「クビ」を宣告され、単発の仕事を探しながらの毎日を送っている。

住んでいる地域は18歳まで医療費が無料である。しかし、医療費はいったん立て替えて支払い、その後、医療費の申請を行い、一件につき500円差し引かれて戻ってくる。手数料を何とかならないか相談しても相手にしてくれない。

【聴き取りの分析と考察】

<入学・新生活応援給付金について>

今回の聴き取りを通して「入学・新生活応援給付金」が当事者本位の制度として機能する要因が大きく5つ考えられる。その5つとは、①給付型（返さなくていい）、②包摂型（就職する人などにも）、③時期適応（入学や新生活の前・直後にもらえる）、④使途自由（使い道が限られていない）、⑤手続き簡素（最低限の手続き）である。

① 給付型（返さなくてもいい）

『返さなくてもいい給付金はとてもありがたかった』

『「給付金」ということが一番の魅力だった。もらえるんだったらもらっておかないとという気持ちが強かったし、それだけ困っていた。貸付だったら応募していなかったと思う』

『お金が必要で、眠れない日が続いていた。必要最低限でいいと言ってくれる子どもに、それさえも難しいと言えず、本当に感謝している。返還の必要がない給付金は魅力的だった』

『（お姉さんの進学にあたり、少しお金を借りていたので）返還しないといけないお金は大変なので、給付は魅力的だった』

国や自治体、学校による給付型奨学金など支援制度が広がってきているが、まだ給付型の機能をもった制度は多くない。また、一見は給付型に思えても成績や進路など条件のハードルが高いもの（メリットベースの給付型奨学金）や場合によって半額または全額が貸与となる「給付金」も存在する。従って、給付型の機能は単体としてではなく「②包摂型」もセットで考えることが望ましいだろう。

② 包摂型（就職する人などにも）

『就職して施設を出る人への給付金制度はあまりないので魅力を感じた』

『自治体からの委託費だけでは（入学・新生活に）必要な費用の4分の1から3分の1くらいしか賄うことができない。あすのばのような団体や給付金制度があることでファミリーホームを応援してもらえているということがわかり心強かった』

包摂型の機能は「自分が給付金の対象なのか」に関連するものである。2015年度の入学・新生活応援給付金は、生活保護世帯・住民税非課税世帯・社

会的養護で育つ子どものうち、義務教育後について高校に入学する人ではなく「中学校を卒業する人」、また、「高校卒業生等（高校またはそれに準ずる学校の卒業予定の人、あるいは大学・短大・専門学校またはそれに準ずる学校へ進学予定の人）」が対象となっているため、進路が就職でも応募できる。また、今回の聴き取りでは特に話にあがらなかったが「成績不問」についても同様の機能性があつたと考えられる。

③ 時期適応（入学や新生活の前・直後にもらえる）

『給付金の支給時期も3月だったので助かった。他の場合、入学後というケースが多い』

『就学援助は7月にならないと受け取れず、一番お金のかかる入学前・入学直後に現金としていただけたことがありがたかった』

『大体はお下がりで済ませているが、小学校に入学する新生活で新しい服を買ってあげられたのも良かった』

『奨学金は学費などを支払う期日のあとにもらえる。その前にお金が必要だと思っていたので、あすのばの給付金で授業に間に合うように教科書や電子辞書を買うことができた』

『日々の暮らしの最低限は何とかできるけど、入学や何かあつたなどまとまつたお金が必要な時が本当に困るから、そのような時に一時金としてもらえるのも魅力だった』

入学・新生活において特にお金のかかる時期は、入学・新生活が始まる前と直後だろう。費用を支払う時期は新生活が始まった後だったとしても多くは新生活前に準備しておく必要がある。一番ニーズの高い時期に適応した形で給付金を支給することが重要であり、同じような支援制度でも時期が変わるだけで当事者にとって「不便」な制度に変わってしまうかもしれない。

④ 使途自由（使い道が限られていない）

『使途が限られていない点も良かった。母子寡婦連合会や母子生活支援施設からランドセルなど現物支給の支援はいくらかあるので、使途が限定されていた場合は応募しなかった可能性もあつた』

『給付金は制服の購入で助けられた。中学校入学の時は入学前からママ友の先輩に「サイズとかどんなものでも良いから」と話し、もらうことができたが、高校では進む学校が別々なので、お下がりをもろることが難しかった』

『検定料や実習にかかる費用など入学してから判明したお金があり、給付金は検定料などに使った。支払いの直前になって伝えられることが多く、あすのば

の給付金制度があって本当に良かった』

使途が自由という機能は、当事者への実効力が高まる。入学・新生活において現物支給や使途が限られていたとしてもニーズに対応する様々な制度があれば良いが、現状は非常に限定的だろう。また、進学・就職といった単純な形だけでなく進学の場合は公立か私立か／大学か専門学校か、就職の場合も自宅から通うか一人暮らしか／仕事の制服や用品をそろえる必要があるかないかなど進路が多様化されており、ニーズも多様である。

⑤ 手続き簡素（最低限の手続き）

『役所で4万円弱の無利子の貸与の一時金の手続きに、子ども本人の同意書や保証人など手続きも多くうんざりした。必要最低限の手続きで送金してくれることはとてもありがたかった。他の制度だと職場に毎月の給料などについてもわざわざ特別な様式で書いてもらわないといけないようなものがあるが、職場にいろいろな事情を話すこともしなくてはならないし、負担が大きい』

「入学・新生活応援給付金」は申込書一枚で申し込みができて、審査・選考を経て内定後に証明書類が必要となる。また、事前の問い合わせは必要なく直接インターネットから申込書やしおりをダウンロードができることも手続きを簡素にする機能あるだろう。しかし、可能な限り簡素な申込書の設計にしているが、記入が難しい人やインターネットにアクセスできない人の多くは問い合わせをして事務局から対応・郵送することもあるなど課題もある。

その他、聴き取りでは、給付金は入学・新生活に必要なすべての費用を賄えない一方、給付金が準備資金や他の支援制度だけでは不足する部分を補うことで入学・新生活へ向かう子どもたちの背中を押せる可能性を確認できた。そして、草の根で広く社会から集めた財源やあすのばの行事につながったことで心の面の支えにつながる可能性も確認できた。

今後も「入学・新生活応援給付金」が当事者にとって役に立つ制度であるために分析や考察を積み重ね、制度の改善を目指していきたい。また、この給付金をモデルケースとした地域や国への提言や、給付金を届けるだけで終わらない「物心両面」での支援を一つのパッケージとして制度展開のさらなる検討をすすめたい。

＜生活状況について＞

今回の聴き取りでは、入学・新生活を迎えた子どもや保護者・施設長などの生活状況から今後の子どもの貧困対策を考える論点が大きく4つ考えられるだろう。その4つとは、①自助努力の限界（どこまでを自助努力の範疇とするのか）、②地域や周りとの関係性（支え合いはどこまで有効な対策か）、③教育費と生活局面（どのくらいのお金がいつかかるのか）、④必要な支援策（保障されるべき「当たり前」は何か）である。これらの論点はこれまでも研究者らにより明らかにしようとされてきたが、改めて彼らの言葉から分析・考察を行った。

① 自助努力の限界（どこまでを自助努力の範疇とするのか）

『食事は一日三食摂らず「お腹が空いたら食べる。空かなかつたら食べない」を徹底している。夏場は特に喉が渴くので、飲み物を優先した』

『お母さんは求職中で仕事がない状態。児童扶養手当（子ども2人は18歳になったので1人分）と養育費と貯金を切り崩して生活をしている。仕事も年齢的なことや結婚していた期間は専業主婦だったこともありパートの仕事で安定することは難しく、厳しい生活が続いている』

『昨年度末で会社の業績悪化を理由に勤めていた仕事を会社都合で辞めることになった。Eさんのお姉さんの体調が優れず長期入院することになるなど、生活が落ち着かず昨年いっぱいまでは失業保険で何とかつないだ。失業保険が出ているうちに母子寡婦連合会が実施する資格が取れる講習を受け、今月から登録制の仕事を始めた。姉も12月で退院して再び学校へ通い始めるが、また体調を壊しがちになっている。本当は週5日フルタイムで働きたいが、心配でなかなかそうもできない』

『教育免許をとるために大学2年生になるとまたお金がかかる。バイトもしているが、もっと稼げるバイトじゃないとやっていけない。母はくも膜下出血で手術をして現在も療養中で病院に通うなど働けない。お母さんも子どもの頃にお金がなくて大学に行けなかった。お母さんはおばあちゃんに預けられて育ち、お母さんが進学するために貯めていたお金も盗まれたりして大変だった。同じ想いをさせたくないから「お金はどうかする」と言って、借りられるところから何とかお金を借りて進学できた』

『塾にも行きたいが、お金がない。学校の授業が終わって、図書館で自学自習して家に戻り、毎日深夜まで机に向かい勉強している。お母さんは10年前まで3つの仕事を掛け持ちして仕事をしていた。その結果、身体を壊して働けなくなった。役所で相談したら、まずは子どもを「児童養護施設に入れろ」と言われた。子どもたちと一緒に生活するために生活保護を受けるまでは無理を重

ねた』

『仕事は契約を打ち切られ、新聞配達で細々と生計を何とか維持してきたが、その新聞配達もダメになった。田舎では仕事がない。Mさんの治療や手術のため何度も東京へ連れて行くため、交通費の負担が半端ではない。子どもたちのためのお金だけは何とか頑張って払っていた。しかし、Mさんの入院を機に新聞配達の会社から「クビ」を宣告され、単発の仕事を探しながらの毎日を送っている』

子どもの貧困について、自助努力が足りていないと考える人もいるが、今回の聴き取りでは切り詰めるところを切り詰めながら一生懸命努力をしてもなお苦しい状況にあることが分かった。また、自助努力の限界（どこまでを自助努力の範疇とするのか）という論点は、決して経済的に苦しい状況にある子どもや親だけに関わる課題ではない。個人の能力が重要視される現代社会や働く環境の変化によって、個人への負担は今を生きるすべての人に大きくのしかかっている。そして、この論点はすべての論点にも深く関連しており、子どもの貧困対策の本質的課題の一つだろう。今一度、社会の中でこの論点を議論し合意の形成をする時期がきているのではないだろうか。

② 地域・周りとの関係性（支え合いはどこまで有効な対策か）

『今まで施設に居て生活することは守られていたので、知らないこと、わからないことが多い。初めてアパートでの一人暮らし。電気料金の検針票が郵便ポストに入っていた。その内容とその用紙を見て、使用料はどうしたらよいかわからなかった。わからないことは、施設職員に聞くことや相談ができるし、施設にも行けるので助かる』

『高校入学後、お母さんが10日間ほど入院した。その間Bさんは一人で家において生活しなければいけなくなったので、心配だし大変だった。バトミントンを小学校から一緒にやっている仲の良い友だちの家が近くにいるから頼れる』

『担任に何を相談しても「無理」だったり、返事がなかった。あまりにひどかったので、11月に地元公立中学校に転校した。地元公立中学校は、教頭先生も担任の先生もとても対応がよく、息子の受け入れもとてもスムーズにしていた』

『近所の同世代で友だちになった人が同じ母子家庭で、その人経由で母子会につながった。離婚後落ち着いたら実家から出るつもりだったが、長男のこともあり今も実家で祖母と一緒に暮らしている。長男は高校に入ったあとで引きこもりになり3年くらい大変な生活が続いた。長男に付き添いきりで、なかなか下の子ども3人を看ることができなかった。祖母と一緒にいてくれたので何と

かなった』

『大きな薄型テレビが部屋には少し不釣り合いだったが、「これももらい物です」と飾らずにお母さんは話してくださった。食べるものが何もなかった時、近所の人クーラーボックスいっぱい食料品を詰め込んで持ってきてくれたこともあった。Kさんの学校の事務員とも仲良くなり、家の事情もすべて話している。お金がない時は「半月待って」と連絡して、待ってもらっている。人間関係でなんとか生きている。田舎では、三世代と一緒に生活しているから何とか豊かさが保っていられるだけで、これが崩壊すると、一気に苦しい地域となる可能性が高い』

一つ目の論点である「どこまでを自助努力の範疇とするのか」は、裏返せば「どこまでを共助（地域や周りの支え合い）や公助（国や自治体の公的支援）の範疇とするのか」ということである。今回の聴き取りでは地域や周りからの支えがあって何とかなっていると話されることも少なくなかった。「入学・新生活応援給付金」も自ら応募した人よりも周りから勧められて応募した人の方が多いため、聴き取りの対象となる人たちは地域や周りとの関係性が比較的良好な場合が多いと考えられる。その地域や周りについて、学校の先生や生活保護のケースワーカー、施設職員、近所の人などこれらの人たちは少なからずどの子どもや親にも「関係がある」もので、重要なことは、それらの人からの「理解や支えがあるか」である。今後は「入学・新生活応援給付金」の情報のリーチ経路（どのようなルートで情報が届いたのか）を分析することで、どこへ重点的にアプローチをかけることでさらに情報が届くのか議論することができるだろう。しかし、前述の個人への負担が大きいのしかかる今日、地域や周りの人も自分のことで精一杯という人たちも多い。支え合いはどこまで有効な対策かさらに踏み込んで議論を深める必要があるのではないだろうか。

③ 教育費と生活局面（どのくらいのお金がいつかかるのか）

『ずっと高校に入ったらやりたかった部活動はユニフォームだけではなく、大会などで遠征が多くある。先日も遠征があったが、お母さんは「それは申し訳ない、ごめんなさいと、この子だけ行けなかった」と話す。他の遠征も最初は無理かなと思っていたが、先生からお願いされて何とか遠征費を捻出した。続けていくためにもお金がかかる。報道で高校生に批判があり、冷たい言葉を聞くと、お金がないから部活を辞めろと言われてるように感じた』

『専門学校によっては授業料を安く抑えて月々の検定料などは別途で、というシステムがある。入学時は費用が抑えられると思ったが、入学してから少なくとも10万円くらいは検定料や実習などでお金がかかった。電車の運賃が高く

定期代も高く、通学にもお金がかかる』

『ファミリーホームは、児童養護施設と違って自治体から委託費なども十分ではない。入学においてもすべてを賄うことが難しい』

「入学・新生活応援給付金」についての分析・考察でも、給付金は入学・新生活に必要なすべての費用を賄えない一方、給付金が準備資金や他の支援制度だけでは不足する部分を補う機能の可能性を述べた。文部科学省の「子どもの学習費調査（2014年）」では、公立高校だと年間410,000円、私立高校だと年間995,000円の学習費がかかると言われている。今回のある聴き取りでは公立高校を目指していたが結果的に私立高校入学となった子どもにかかった入学関係費用の内訳を共有してくれた。

項 目	聴き取りをした家庭
入学時	
受験料（公立前期・後期）	4,400円
受験料（私立）	14,000円
高校入学金	50,000円
施設設備費	140,000円
制服代	88,480円
教科書代	8,580円
教材・諸経費	43,700円
入学時合計	349,160円
一年間	
授業料 ※免除	(396,000円)
設備維持費	120,000円
教育運営費	96,600円
諸会費	50,710円
部活動 ※一年目	108,530円
通学費	51,240円
一年間合計	427,080円 (823,080円)
教育費 総計 ※入学一年目	776,240円 (1,172,240円)

部活動以外の一年間にかかる費用（318,550円）の実際は月額であり、この聴き取りをした家庭は月々26,546円がかかる。それと別に部活動のユニフォー

ムや合宿・遠征などで108,530円がかかる。そして、入学時には349,160円がかかった。なお、この入学関係費用の内訳を「子どもの学習費調査」の項目に分けて比較した表は以下の通りである。授業料は経済的理由で免除となったが、各項目で調査の結果よりもお金がかかっている。この教育費がどのくらいかかり、「入学・新生活応援給付金」や他の支援制度がどの程度カバーできて、カバーされるべきなのかさらなる議論が必要だろう。

項目	聴き取りをした家庭	学習費調査（2014年）
授業料 ※免除	(396,000円)	258,542円
学校納付金等	475,710円	228,655円
受験料（公立前期・後期）	4,400円	
受験料（私立）	14,000円	
高校入学金	50,000円	
施設設備費	140,000円	
設備維持費（年間）	120,000円	
教育運営費（年間）	96,600円	
諸会費（年間）	50,710円	
図書・学用品・実習材料費等	52,280円	39,191円
教科書代	8,580円	
教材・諸経費	43,700円	
教科外活動費	108,530円	45,892円
通学関係費	139,720円	111,297円
通学費	51,240円	
制服代	88,480円	
合計	776,240円 (1,172,240円)	683,577円

※文部科学省 平成26年度「子どもの学習費調査」

※項目は調査結果のうち聴き取りをした家庭から共有された項目のみ抽出

また、入学関係費用の内訳を共有してくれた家庭のように入学時や月ごとなどその費用がいつかかるのか詳細を「見える化」する必要があるだろう。今回の聴き取りでも、毎月の生活は何とかするけどまとまったお金が必要になった時に困るというような声もあった。そういった時に借金をするなど入学・新生活が悪循環に陥る入り口であってはいけないのではないだろうか。

④ 必要な支援策（保障されるべき「当たり前」は何か）

『まだお母さんに甘えたい歳で、いつも家でお姉さんも一緒にお母さんにくっついていて。お母さんも「子どもと一緒にいられる時間を大切にしたい」と話す。住宅関係の貸付制度も考えたが、自分が何かあって倒れてしまった時のことを考えると貸付は手が出せない。公営住宅も応募したが、8番目で8世帯転出がないと入れない状態』

『小さい時からお金に困っていることは分かっている、色々がまんし続け、今も友だちに遊びに行こうと言われてもしょっちゅう断っている。お母さんのも含めてあまり服も買わないけど、買い物に出かけると優先して買ってきて、お母さんの服があまりない。子どもだけでなく、お母さんが集まれる場所や機会もあれば良いと思う』

『一つの部屋にIさん・お母さん・お父さん・勉強しているIさんの妹の全員がいた。聴き取りの間もずっと妹が勉強机に向かって勉強していた』

『ファミリーホームの子どもの場合、特別な事情がなければ家庭教師の費用を出してもらうことができない。そのため、派遣型（家庭教師型）の学習支援制度などがあればいいとも思っている』

『自転車壊れた時、生活保護の担当者に相談したが、結果は「生活保護費の中で積み立てて購入して」だった。結論が出るまでに時間がかかり、積み立てるでは、相談した意味がない。お金が出せないならば、中古自転車などリサイクル商品の情報を出してほしいと思った。地域で子ども食堂が開設されたことは知っているが、その場所へ行くのに交通の便が悪い。もっと工夫をしてくれれば、支援を必要としている人たちに届くのではないかと思っている』

『住んでいる地域は18歳まで医療費が無料である。しかし、医療費はいったん立て替えて支払い、その後、医療費の申請を行い、一件につき500円差し引かれて戻ってくる。手数料を何とかならないか相談しても相手にしてくれない』

前述の3つの論点をあげたうえで、必要な支援策は何なのだろうか。言い換えれば、保障されるべき「当たり前」は何か、ということである。小学生や中学生の子どもが学校から帰宅したあと家や周りに見守る親や大人がいることは最低限保障される「当たり前」なのだろうか。友だちと遊ぶことや最低限の服はどうだろうか。勉強に集中できる部屋、塾や家庭教師、生活するための自転車、医療費など聴き取りから得た考えるべき点は多い。入学・新生活にかかる制服や学用品、部活動などの教育費も同様である。子どもや家庭によっては「方針」でそうしないことも考えられるが、重要なことは、それらの「当たり前」が選択できるものとして担保されているかということだろう。

【聴き取りのまとめ】

今回の聴き取りによって、「入学・新生活応援給付金」の機能と今後の子どもの貧困対策を考える論点が分析・考察された。

「入学・新生活応援給付金」の機能

- ① 給付型（返さなくていい）
- ② 包摂型（就職する人などにも）
- ③ 時期適応（入学や新生活の前・直後にもらえる）
- ④ 使途自由（使い道が限られていない）
- ⑤ 手続き簡素（最低限の手続き）

今後の子どもの貧困対策を考える論点

- ① 自助努力の限界（どこまでを自助努力の範疇とするのか）
- ② 地域や周りとの関係性（支え合いはどこまで有効な対策か）
- ③ 教育費と生活局面（どのくらいのお金がいつかかるのか）
- ④ 必要な支援策（保障されるべき「当たり前」は何か）

他にも「入学・新生活応援給付金」では、入学・新生活に必要なすべての費用を賄えない一方、給付金が準備資金や他の支援制度だけでは不足する部分を補うことで入学・新生活へ向かう子どもたちの背中を押せる可能性や、草の根で広く社会から集めた財源やあすのばの行事につながったことで心の面の支えにつながる可能性が確認できた。それぞれの機能と可能性を伸ばし、阻害する課題を改善していくことが今後の事業展開で望まれる。

また、今後の子どもの貧困対策を考える論点において、物心両面での支援やそれらの論点が多子世帯・ひとり親・生活保護・社会的養護または進路などの状況ごと、小学生～大学生世代までの世代ごとの分析・考察も必要である。そして、論点によっては、給付金を利用した対象者の実態把握のみならず広く社会全体への調査や合意の形成が必要となる。

子どもの貧困という社会課題は、経済的に苦しい家庭や子どもをいかに救済するかという課題だけではなく、私たちの生きる社会と明日をどうすべきかという課題であることを忘れてはならない。子どもの貧困対策は私たちの生きる社会と明日を「子ども」という切り口から考えるアプローチである。今後も「入学・新生活応援給付金」を届けた子どもたちやあすのばで会う子どもたちと一緒に、社会全体へ参画を促しながら新しい明日に向けた模索とその制度と文化をつくる実践を続けていきたい。

（聴き取りの分析・考察担当 事務局長・村尾政樹）